「日々の理科」（第 2375 号）　2021,-1,12

「冬のニホンジカ」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

日本には「ヒト」（人間の大人）よりも大きい、「野生の大型哺乳類」は数種類しかいない。「ヒグマ」「ツキノワグマ」「カモシカ」「ニホンジカ」ぐらいだろう。ヒグマは本州にはいないし、ツキノワグマは冬眠しているので、冬の本州で見られるのは「カモシカ」と「ニホンジカ」しかいない。あとはヒトよりも小さなサイズの「中型・小型哺乳類」ばかりだ。

冬休みに、北軽井沢の山荘周辺のササ藪に、大きな動物が現れた。シカのようだ。このあたりにはシカも多く、時期によっては親子で歩いているのを見かけることもある。

角がなく小型なので、ニホンジカ（ホンシュウジカ）のメスのようである。メスは体重が 50～80kg 程度で、ヒトの大人と同じぐらいのサイズと言える。

自分（観察者）とシカとの距離はわずか 20 メートルほどだ。相手も、明らかにこちらの存在に気付いていて、時々目線が合う。しかし、特に警戒している様子もなく、10 分以上、付近をウロウロしていた。

シカというと、バンビのように斑点模様（鹿の子模様）の体毛を思い浮かべるが、あれは「夏毛」の特徴である。冬は斑点模様は消えて、全身が茶色い毛で覆われる。ただ、お尻の周囲だけは白く、それが黒く縁どられているのが特徴だ。

この日はほとんど雪がなかったが、雪と地面が混在したような、初雪や残雪の時期だと、このお尻の白毛と茶色い体毛が、風景と溶け合って保護色のような役割を果たす。冬の今の時期は、ニホンジカにとって天敵はいない。しかし、春先にツキノワグマが冬眠から醒めると、稀にシカを襲うこともあるようだ。残雪期の保護色に適しているのは、その為かも知れない。